

# Jネット勉強会(第十五回) 「鉛筆製造会社」見学会

大倉町 藤沢 勝一郎(東本町四丁目出身)

小学校時代から慣れ親しみ、今も使っている鉛筆。

今回の見学会は、東京都葛飾区にある北星(きたほし)鉛筆(株)です。

平成二十三年十月五日(日)、この日は、あいにくの土砂降り雨でしたが、見学会参加者は八人。

同社の鉛筆学習施設「東京ペンシルラボ」で、鉛筆が完成するまでのビデオを見、説明を聞く。

ビデオは次長課長の漫才コンビと同社の専務が出演していて、鉛筆が製品になるまでの分かり易く、いたってまじめな内容。

鉛筆工業組合に加入している現存する四十四社のほとんどが区内と墨田区にあつて、残りは隣接区市に若干あるとのこと。

鉛筆製造は、まさに東京の地場産業の

一つであり、学校からの見学会も多い。

見学会が有料なのは、大企業と違いそれほどの余裕がないこと、無料だと説明をしつかり聞いてくれないからとのこと。

わが国での鉛筆の使用は、徳川家康、伊達政宗らが最初であり、今もその鉛筆がそれぞれの收藏館に残されている。

鉛筆の長さは、大人の手のひらの付け根から中指の先までの長さ(わが国では十七・二センチメートル以上)をとったもの。濃さはHBなど七種類、HBのもの。濃さや硬さはJISで定められているものの、HB以外の濃さなどは製造会社によつて差があること、鉛筆一本で書ける

長さは五十キロメートル、ボールペンでは一・五キロメートル、シャープペン(一ケース四十本)では十キロメートルのことでした。

また、大手の三菱鉛筆(株)が、三菱重工

(株)や三菱電機(株)などの三菱グループとは全く関係ないことも初耳でした(三菱鉛筆(株)が先に、商標登録しているため)。

国内の鉛筆製造本数は年間およそ三億本(最盛期の五分の一)で、同社はこの内の約十%を製造しているという。

ラボ隣りの工場では、黒鉛粉末と粘土を焼成しての芯の製造、鉛筆の軸木となるヒノキ科インセンスシダーを板状にしたスラット、九本の溝を入れたスラット同士で芯を挟み接着、それを鉛筆の形に片面すつ削つて六角形の鉛筆を製造している。この鉛筆に六・七回塗装をして製品に仕上げる。スラットはほとんど七本溝用のものであるが、これを九本溝にするところに、同社の精密加工技術があり、同時に廃棄物の減量にも繋がっている。甘い香りは、インセンスシダーの削りくずから発せられるものであつた。

ちなみに、インセンスシダーは米国カリフォルニア州産、芯の黒鉛は中国産が多く、粘土はドイツと中国産のものが多く使われているなど、原材料の多くは輸入によるもの。

使っていた機械は、製造後六十年経っているものであるが、丁寧な保守管理と部品の点検修理をしている。一方、数千万円はかかるという機械を必要なら試行錯誤しながら二十万円ほどで手作りしてしまうなどという点には本心に感心し

た。見学会はアナログ、マニアック的な所がかなりあつたため、視覚的に理解しやすかつた。

ラボに戻り、大量に出る削りくずを微粉末にしてリサイクルした粘土「もくねさんさん」で工作。犬、猫、飛行機などを型押しして作り、小学生になつたような気分が楽しめました。

作った作品は、二・三日すると乾いて・軽・硬くなり陶器かプラスチック製品のようになりました。

持ち帰った作品のいくつかは欲しいという近所の子ども達にあげました。

★北星鉛筆(株)

東京都葛飾区四ツ木一-二十三の十一  
電話 ○三・三六九三・〇七七七  
交通 京成電鉄「四ツ木駅」下車。

徒歩五分



